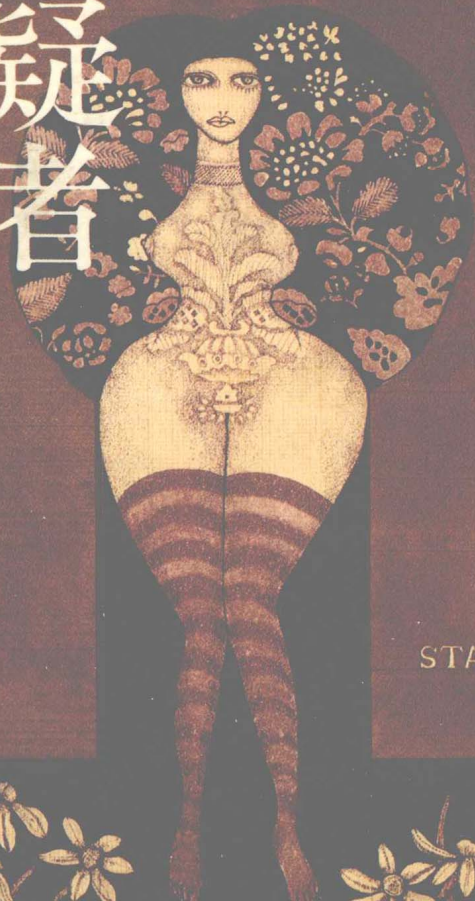


原田康子

素直な容疑者



STANDBILDER DIE FREMDL



素直な容疑者



原田康子（はらだ・やすこ）

一九二八年、東京に生まれる。釧路市立高女卒。地方新聞記者の経験をもつ。五四年、『サビタの記憶』が「新潮」全国同人雑誌優秀作に選ばれる。五六年、長篇『挽歌』が完成、出版されるとヒロイン像が戦後派少女の出現としてブームをひき起こし、翌年、女流文学賞を受賞する。著書として他に『望郷』『北の林』『虹』『日曜日の白い雲』などがある。

素直な容疑者

一九八〇年二月二〇日第一刷印刷

一九八〇年二月二五日第一刷発行

定価 一〇〇円

著者 原田 康子

発行者 寺田 博

発行所 株式会社 作品社

東京都千代田区飯田橋二ノ七ノ四
〒101 電話(〇三)二六二九七五三
振替口座(東京)六二七一八三

印刷・製本 図書印刷

(落・乱丁本はお取替え致します)

素直な容疑者——目次

素直な容疑者
7

空巢専門
59

朝までの五時間
101

峠
131

窓辺の娘
159

海を射つとき
183

装 画
丁

菊 山
地 下
信 清
義 澄

素直な容疑者

素直な容疑者

その日の朝の寝ざめは、それほど悪いものではなかった。やさしく充ちたりていて、そのくせなにかもの悲しく、やるせない気分だった。女の横で朝をむかえるのは、なにしろはじめての経験だった。

明は夢うつつに小鳥の声を聞いていた。十月ののどかな朝の、やわらかな日射しとたわむれている鳴き声のようだった。それが隣の部屋で鳴いている小鳥の声であり、小鳥はローラー・カナリアだとはっきり気づいた瞬間、明はびくとした。頬に冷たいものがひやりとあたっていた。明はこわごわ女の肩に手をのぼした。肩も乳房とおなじように冷たかった。氷の冷たさともまたちがう、死んだ人間の冷たさだった。背すじにつうつと悪寒が走って、明ははね起きた。女は目をとじてなかなば口をあけ、片はうの手を投げ出していた。シーツが赤くよごれ、ベッドの脇に真赤な四角なものがひかっていた。それがなにか、明はろくに見もしなかった。彼はやにわに女の

からだに上体を投げかけていた。

「奥さん、奥さん……」

明が女の肩をゆすぶると、女の頭はかすかにゆれた。こわれた人形のようなきこちなさだった。明は女の頭を両手でしっかりはさむと、女の口にくちびるを押しつけた。しかし、女のくちびるは固くて冷たく、なんの反応も示さなかった。明はふたたび女をゆすぶり、頬を顔に伏せた。もう声は出なかった。熱したするどいナイフで、心臓を縦横に切りきざまれているようだった。

明はようやく上体を起こした。女の歯と歯のあいだの細いすき間に、こわばった舌の先がのぞいていた。毛布の襟もよごれていた。

ベッドの横の四角な赤いものは、真赤な水をたたえた水槽だった。女は手首を切ったらしい。片ほうの腕を水につけて死んでいた。水は手首の上までであったが、ひじまでとどいてはいなかった。ひじと手首のちょうどなかばあたりまで水につかっていた。そして血で染った水面に、赤んぼうの小指大のものがぶかぶか浮かんでいた。熱帯魚の死骸だった。熱帯魚は白い腹を見せ、そのひとつは女の腕の内がわにはりついていた。

明はベッドから飛び降りると、パジャマのままドアのそばまでとんで行った。隣の部屋へ通じ

るドアだ。しかし、鍵がかかっていた。明はドアをたたき、それからそのドアは、鍵をつかわずともなからあけることができるシンダー錠がつけられていることに気づいた。

隣は居間らしかった。ノックの音を聞いたのか、明がドアをあけると、女中らしいエプロン姿の娘が、部屋の真中に突っ立っていた。明を見ると、娘の目がまんまるになった。満月よりもまろくなった。娘は二、三步あとずさりすると、するどい悲鳴をあげながら廊下のほうへ駆け出して行った。明は娘のことなど気にしてはいられなかった。

彼はこの部屋にあるかもしれない電話機をさがした。それは一方の壁ぎわの、サイドボードの上にあった。明は受話器をとると、ふるえる指で百十番ヘダイヤルをした。齒もひざ頭もふるえていた。

明が受話器を置いたとき、みだれた足音が階段に聞こえて、ピンクのかたまりが部屋にとびこんで来た。ピンクのパジャマを着たまだ若い娘だった。娘は明に目もくれずに、女の寝室に駆けこんで行った。ピンクの疾風がかすめていったようだった。

娘のあとから、女中らしいさっきの娘がもどって来た。女中は寝室にはいなかった。戸口におずおず立って寝室をのぞきこむと、大きく息を吸いこんだ。明は女中の横をすりぬけて寝室にもどった。ピンクのパジャマの娘が、ベッドにさがりこんで女に抱きついていて。娘は女におお

いかぶさり、両手でしっかり女の頭をはさんでいた。娘の細い指のあいだで女の黒い髪がゆれうごいていた。娘は髪を強く引っつかんでいるようだった。喉から意味のとれない言葉がもれていた。しゃっくりのようだった。

警官が到着するまで、明はぼんやり娘と女を見おろしていた。明はまだ女の死を信じられなかった。夢でも見ているようだった。カーテンをおろしたままの寝室はほの暗く、娘のパジャマのピンクも、シーツと水槽の血の色も、夢のなかの色彩のようにぼやけて見えた。明は娘を女から引きはなして、もう一度女の頬にさわってみたかったが、そんな真似はできなかった。娘が何者なのか、明は知らなかった。こんな娘がこの家にいたことさえ、彼はいままで知らなかったのである。まもなくパトカーのサイレンの音が聞こえて玄関のブザーが鳴り、制服の警官が数人寝室にはいつて来た。警官の一人が娘を死体から引きはなそうとすると、娘はますます強く女にしがみついた。警官は二人がかりで娘をベッドからおろし、両脇から娘を抱えるようにして居間のほうへつれて行った。いつ来たのか、私服の刑事も二、三人、ベッドの近くに立っていた。明が彼等に気づいたとき、彼等の視線は全部明にそそがれていた。

「あんたが見つけたんだね」とそのなかの一人が聞いた。

「ええ」と明はうなずいた。

「このうちの者じゃないな」

「ええ」

「いつ来たんだ？」

「ゆうべです。ゆうべおそくです」

「名前は？」

「庄司です。庄司明……」

「いくつだ？」

「十九です」

「学生か？」

「ちがいます。浪人です」

刑事は明の住所をたずね、女との関係をたずねた。明は観念するはかなかった。

「僕はゆうべ、この近くで奥さんに会ったんです。奥さんにつれて来られたんです」

「ゆうべがはじめてかね？」

「ええ」

「前からの知合いじゃないのかね？」

「ええ」

「ふむ」

刑事はまだじろじろ明を見まわしていた。無遠慮に全身くまなく目でさぐっていた。刑事が戸口のほうを見てあごをしゃくると、青白いひかりがぱっとひらめいた。フラッシュの閃光だった。白の上っぱりを羽おった鑑識の男が、明にカメラをむけていた。

明はさすがにびっくりした。相手の刑事は明の背を押して三面鏡の前までつれて行くと、ハンカチをつかって注意深く鏡をひらいた。右半面が赤くよごれた彼の顔が鏡にうつった。血は、パジャマの襟と肩口もよごしていた。明は棒立ちになった。それから目まいがした。足もとから力がぬけていって、目がかすみかけた。

刑事が明の背をささえた。

「まあ、いいさ。そのへんで休んでもらおう。顔を洗って、着がえたほうがいいな。その恰好じゃ寒いだろうし、気分も悪いだろう」

べつの刑事が、明のズボンやセーターやスポーツシャツを投げて寄こした。明は刑事たちに見守られながらパジャマをぬいだ。それは白地に紺とグレーの縞がはいった、ありふれた男物のパジャマだった。もちろん、明のパジャマではない。女が着せてくれたのだった。洗濯はしてあっ